



遠近新聞

第廿號

定價一匁



西垣文庫  
文庫 10  
7265  
18



特 文庫10  
7265  
18



遠近新聞第二十号

慶應四年五月十八日

人よりて五倫の道を失ふ者ハ所謂人面獸心よりて  
其罪天地に容る可らざるものありされどまじき君の  
威権を以て臣民をして五倫の道を失せしむるハ其  
罪更ニ重大といはんハ往古魯西亜國內ニ一諸侯ハ  
よりが頗る暴悪無道の君よりて臣民を酷虐する事  
甚しく殊ニ姿色ある婦人と聞けハ夫ある者と虫も  
擅ニ召して之を犯し圍情尤も深々れば直ニ之を妾

遠近新聞

第二十号

百



5729

とせし事常あり俛夫あるを告げ歎願固辞する婦人  
有りしが敢て用ひせ凡そ余が臣民として人者余が命  
を奉る事ハ敢て是非曲直を論ぜざるに奉命する事  
あるは夫有りとして君の命を背せざるに大義は背く  
者より甚不埒の至りありとして直に誅戮せしむるを  
されど大方ハ欲ふらば女よりて美不美を顧みず夫を  
捨て君命に従ひられば其寵愛一方ありて榮耀榮華  
を極めし數年の後暴政益募りられば国乱かこり  
て其君遂に弑せられしとかや其時彼欲ふらば妾等  
も共に誅戮せしむるにぞ実天罰の思ろしきも

のよこを

如何堂主人記

○日光より歸府の人の咄

閏四月十八日會落共純美隊一同白川城を攻め取り  
其節長州家老某醍醐殿附二人を暗殺し  
奥羽の大名近日白川城に會合の上大軍押し出る由  
是ハ仙臺會津兩藩の家老より檄文お廻りし事  
九条殿醍醐殿兩御仙臺城を爲入の筈亦も正邪分  
明にお成り迄は歸り無之積りしに仙會兩藩は頼  
と有之し事  
會藩凡そ四五百人小佐越村に出兵して田中隊原隊

櫻井隊小山田隊と隊長の姓名を唱へ事

廿四日白川の戦争は會兵不出來廿五日仙會脱兵大  
擧いし七藩の兵と大戦争の後官軍太田原を引揚  
よお成り事

栗橋宿通行のせり官軍の手負死人船をて川上より

下りし由同宿のもの中聞ひ古河宿より大垣怪我人

滞留のし居りし

壬生城下より土州人数旅宿りし三百人程と事

今市より土州人数三百人程と事

土州人数五百人程江戸より太田原に向ひ出立し草

加宿より行逢ひ事

日光今市辺度々少々の戦争有之鉢石町彦根人

数大畧今市辺を引き揚げし是れ小佐越の會兵より

戦争仕掛けし舟土州より催促有之由

去月廿五日太田原よりおろす大戦争有之會兵勝利と

事よ座し

○参謀に届書の写

本多美濃守

関東市中取締の爲め人数探り出し得共途中川崎  
宿より八百人程出奔仕行方不お分万一美濃守浪人

とや立て 戦仕ひ哉も難事主人始め重役の者不行  
偏の改奉恐入の関東取締の免国元よあわ  
謹慎在の招仕度此段奉願以上

月

酒井若狭守

此度御門の守備を 仰舟難有仕合奉存の右内門の  
神田橋一ツ橋淺草市ヶ谷内門品川関門幸橋内門右  
六ヶ所明拂ひ出奔仕ひ人数二 人程右招の次第奉  
恐入の主人始め一同国元よ 謹慎仕ひ此段届け  
申上以上

四月

右二通とも真偽未詳

○身命を擲ち兄弟を救ひ一語

千五百七十二年西班牙の兵和蘭のハールレムを圍  
と屢々之を侵撃せし守兵勇猛して烈しく撃返  
されしり西班牙の兵士ダウオラド、グアデラヘラ初と  
りへるもの侵撃は加はり同く撃ち返されしり時  
其兄弟の何れとぞと見て大ひに歎き直し以前の所  
に至り敵の彈丸雨の如く来しども一々其処の屍を  
轉し検査して退くは千辛万苦して索むる内深手を

負ひこれどもいよと死に至らざ地は倒れざるを見  
乃ち之を脊負ふて帰り途中にて自己も彈丸に當り  
傷を受らざるも遂に陣所を連れ帰り兩人とも其傷  
平愈せり兄弟ハ皆斯くあるべしとて賞せらるるは  
ざるに似これども世の利の爲めは兄弟不和を生  
ト遂に相殺すに至るものあり故に之を挙げ以て  
世上利の爲めは人倫を背く者と戒むとのり

○魯西亞のセルジャント試カバトウ名其隊長  
を救ひし話

一千八百二十六年八月十八日魯西亞とペルシーの

戦ひは魯西亞の大將バグラシオン名其兵を率ひて  
ワナンド村の後を往き一時ペルシーの騎兵三百人  
不意に迫り来るバグラシオン之を知るや否や兵を  
整へ防禦せり其時甲比丹試ポドリユツキ深手  
地上に倒れしウバペルシー人既に其首を斬らん  
せし所へセルジャントカバトウ假令助るを  
るも容易く敵の手を渡さずと駈け来り小銃の臺  
尻をふりしに敵兵群集の中を飛らるれば敵も其  
勢に驚き何支の起りやとあきれてこそを見る内  
は大將の命ありしと見へ魯西亞の兵駈け附け甲比

丹を助ぐる工を得たり甲比丹の助うり一々全くカ  
バトウの奮戦よりてあり

同日魯西亞のアジウダント試フレデリクス名味方  
の旗手ラウロウ名深手を負ひ地上に倒さるる尚  
数人き相手を奮戦するを見て單身敵兵の真中へ飛込  
諸方は斬り廻り其間右の怪我人這あが味方の  
兵は近寄り命を全ふせり

右蘭書より抄出

神水學人記

○十六日朝上野を通行せし人の話

上野黒門を御橋へんと戦死九人黒門内は同断三  
人それより山王山大砲備へる所は同断十  
五人なり其外を彼処に七十人余も是なり  
山内へ本坊中堂山門ニツ堂山王山の山王社焼失又  
山外へがん鍋辺より車坂辺まで焼失又一ヶ所の池  
の端仲町竹の門辺過半焼失せり  
上野山内其外近辺官軍方巡邏のし居りし

